

島民の改宗を読み直す

西洋文明との接触が太平洋諸島の人々に対して取り返しのつかない影響を与えたとする「致命的な衝撃 (Fatal Impact)」説については既に紹介した。この説では、島民は圧倒的に優位な西洋文明を前にして立ち尽くすか、それを受動的に受け入れるしかなく、仮に受け入れたとしても西洋文明の受容により島の文化は激変し、かつての「高貴なる野蛮人」は滅び去ってしまうとされた。オセアニアにおける文化接触において、能動的に行動し相手に影響を与えるのは常に西洋人であり、島民は受動的に外来文化の影響を受けるしかないと見なされたのである。キリスト教と島民の関係もこの文脈で捉えられ、宣教師の巧みな宣教戦略によって島民は一方的に改宗させられたと考えられた。

しかし、このような西洋中心的な歴史観に対して、文化接触において島民は必ずしも一方的に影響を受けたのでもなければ、常に受動的に行動したわけでもないことが指摘されるようになった (Davidson 1966)。そのような視点に立ったアプローチは「島中心の歴史学 (Island-centered history)」とも呼ばれ、西洋人よりも島民の活動に焦点を当てた研究や文化接触期に2つの文化の間で揺れ動いた西洋人をテーマとした研究などがなされた。こうして、歴史的事件や人物を詳細に描き込んでいくことで文化の動態を明らかにする民族誌学的歴史学 (ethnographic history) が、太平洋諸島の歴史学の1つのジャンルとして確立されていく。

このような視点に立って島民のキリスト教受容を捉え直すと、彼らが一方的に改宗させられたわけではなく、それぞれの立場で能動的にキリスト教を受け入れていったことが見えてくる。例えば、ミクロネシアのポーンペイでは、島の最高位の首長は状況に応じて弾圧から宣教活動の承認に方向転換し、下位の首長は宣教師に協力することで外的世界への対応の術を身につけて自らの力を強めようとした。また、比較的自由な立場にいた平民女性は宣教師に近づくことで衣類を手に入れようとしたし、平民男性は彼女達を利用して西洋の物資を得ようとして立ち回ったのである (Hanlon 1988)。

西洋の列強の側からではなく、島社会の内側からキリスト教伝播の歴史を詳細に描き出すと、宣教師と島民が自分達の目的を達成するために互いに相手を利用しようとした構図が浮かび上がってくる。島民の視点から見れば、キリスト教への改宗は古い土着の文化に新しい文化を接ぎ木しただけであり、それまでのやり方が僅かに方向修正されたにすぎない。島民は西洋文明という新たな荒波の中で、キリスト教という小さな筏を見つけてそれに乗り込んだだけであり、宣教師が島民を改宗しなければならぬと考えたように、島民も新奇で強力な思考と実践の体系を自分達の生活様式に取り込まねばならぬと考えただけなのである。

このようにキリスト教への改宗を読み直すと、「致命的な衝撃」説とは全く異なった島民の姿が見えてくる。確かに、圧倒的な西洋文明の大波をかぶり、波が引くと島民全員がキリスト教徒となっていたという歴史的解釈は大局的に見れば間違いではない。だが、一つひとつの事例を詳細に読み込めば、その大きな流れの中を巧みに泳ぎきる島民の姿を見出すことができるのだ。

太平洋諸島における宗教運動

オセアニアと呼ばれる地域は、ポリネシア、メラネシア、ミクロネシアとオーストラリア大陸から構成される。3つの“ネシア” (島嶼地域) は、西洋人によって便宜的に区分された地域であり、それは西洋人による他者表象に過ぎないと批判されることもある。だが、それらは文化領域として全く根拠のない区分というわけでもない。政治形態に目をやれば、ポリネシアでは高度に階層化した首長制が発達したのに対し、メラネシアではビッグマンと呼ばれるリーダーが地域社会を統率した。

同一文化領域内での多様性は確かにあったが、それでも太平洋諸島においてキリスト教との接触によって起こった宗教運動は、文化領域ごとに類型化することができる (Swain & Trompf 1995)。例えば、ポリネシアの宗教伝統においてはコスモスの秩序の維持と集団の保護が最も主要なテーマとなっており、文化接触期にはこの地域の島々では天啓を受けた預言者を中心とする一種の千年王国運動が数多く発生した。一方、メラネシアでは物質的繁栄の維持が支配的なモチーフであったため、カーゴ・カルト (積荷信仰) と呼ばれる物質的な充足を求め政治的な宗教運動が発生した。

千年王国運動は、再臨したキリストによって地上の王国が千年間統治された後に最後の審判が下るというキリスト教の救済観と結びついた絶対的な救済を希求する宗教運動である。それは、天変地異、飢饉、疫病、圧政など、社会的な緊張が高まった危機的状況下で起こる宗教運動であり、古い秩序を壊し新しい秩序を確立しようとする社会運動と捉えることができる。この宗教運動は、ポリネシアではキリスト教化の進んだ1820年代から30年代にかけて、タヒチやサモア、ニュージーランドで次々と起こった。

一方、1920年代の植民地状況下のメラネシアにおいて、カーゴ・カルトと呼ばれる宗教運動が発生した。これは、まもなく世界で大異変が起こり、白人達の物資を汽船に満載して自分達の祖先が帰還するという予言に端を発する運動であり、労働放棄、菜園破壊、貯蔵庫の建設、白人への敵対などをその特徴とする。第二次世界大戦後には、「汽船」から「飛行機」に祖先の乗り物のモチーフが変わり、「滑走路」の建設なども行われたが、徐々に生活水準の向上や伝統文化の復興を唱える政治的な運動へと発展していった。

ポリネシアとメラネシアにおけるこれらの宗教運動の対比は、研究者が前者の宗教運動に一人の預言者を見出そうとし、後者の宗教運動に「カーゴ・カルト」的な要素を認めようとしたものとも言える。しかしながら、どちらの運動も土着の宗教文化とキリスト教が出会うことによって生まれたシンクレティックな社会運動であり、後に誕生する土着教会と同様にキリスト教受容における島民の主体性を如実に示すものである。

[参考文献]

Davidson, J.W. (1966) Problems of Pacific History. *The Journal of Pacific History* 1:5-21.

Hanlon, David (1988) *Upon A Stone Altar: A History of the Island of Pohnpei to 1890*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Swain, Tony, and Garry Trompf (1995) *The Religions of Oceania*. London: Routledge.